



村田諒太 vs ゴロフキン戦で写真を撮ったイーファイト吉倉拓児代表 (photo: Naoki Fukuda)



格闘技サイト『イーファイト』 吉倉拓児代表に聞く

祝 20年目

イーファイトが今年20年目に突入した。堅実に業績を伸ばし続け月間1000万ページビューを超える。ここまで続く理由を探ると、何と吉倉氏は小学生の頃から斬新なビジネスを発売してはチャレンジしていたと打ち明けた。そして極真空手の選手時代のこと、さらには格闘技記者となった驚きのエピソードも語った。

取材・文 藤村幸代 text-Yukiyo Fujimura
撮影 福田直樹 (当ページ上吉倉氏写真) photo-Naoki Fukuda
写真提供 吉倉拓児 photo-Takuji Yoshikura

2022年4月9日、さいたまスーパーアリーナ。日本ボクシング史上最大のビッグマッチ、村田諒太 vs ゴロフキンのWBA&IBF世界ミドル級王座統一戦を見届けるべく、会場には約1万5千人の観客が詰めかけた。リングサイドや客席の一角には自らの眼、あるいはレンズを通して歴史的瞬間をとらえる多数のメディアも。格闘技サイト『イーファイト』代表、吉倉拓児氏の姿もその中にあった。

ひと口に「格闘技」といってもジャンルは多岐に渡るため、イーファイトではジャンル担当制を敷いている。吉倉氏は空手や柔道など武道やアマチュア競技、国内外のプロボクシング、そして社会時事ネタを主に担当する。

ビッグマッチともなれば、ファンは試合直後の「速報」を待ち望む。そこで、イーファイトでは撮影、執筆、編集とさらに分業制を敷き、3〜5人体制で秒を競う速報に対応する。今回の村田 vs ゴロフキン戦では吉倉氏が撮影を担当。ゴロフキンの右で村田がダウンを喫したTKOの瞬間をとらえた。



吉倉氏が撮影したゴロフキンのフィニッシュブロー！「最初ももしかしたら村田選手がボディで勝つかもと思っ、その瞬間の写真を多く撮ったけどKOはこの写真になった」と少し残念そう。



95年9月最後の全日本ウエイト制大会での吉倉氏(右)。3つのカウンター(右ストレート、前蹴り、右ローキック)が得意だった。この大会3連勝を果たす三明広幸に延長判定で敗れ引退を決めた。

吉倉氏がイーファイトの母体である「株式会社ヨシクラデザイン」を創業したのは1995年。以来、四半世紀を越えて武道や格闘技取材し、伝え続けている。自身の競技者時代を加えればその格闘技ライフはさらに長く、現在の生き方や経営手腕にも格闘技が色濃く影響し、また活かされているといっ。

彼の類い稀なビジネス編、尾崎豊が縁となった記者編、そして格闘技編と3つに分けて紹介したい。

「格闘技編・極真では全日本参戦、MMAも入会検討」
格闘技の競技者としての原体験は地元富山県で小学5年から始めた柔道だ。高校の昇段審査では4人全で得意の裏投げで一本勝ちし合格したと言っ。しかし高校入学後まもなく新たな武道に出会ったことが、氏の人生を変えたこととなった。

「学校の帰り、たまたまレンタルビデオ屋の前で素手、素足で殴り合う極真空手の映像が流れていたんです。外国人空手家がハイキック一撃でKOするシーンに衝撃を受け、さっそくビデオを借りて。そこからは一気に、極真に夢中になりました」
ちなみに、KOした外国人とはのちに前田日明やホイス・グレレイシー

とも戦うオランダの格闘家、ジェラルド・ゴルドーだった。高校2年の秋に極真空手に入門すると、翌年の県大会では全日本のトップ選手とも渡り合い4位入賞。師である浜井謙安(現・極真会館力謝会代表、師範から「きみは全日本の上を目指せる、頑張れ」と声をかけられた。

周囲の期待を支えに、さらに深く格闘技に傾倒していった吉倉氏は1988年、「小学生から学んだ柔道の投げや組技、極真の打撃を活かしたい」と進学を機に上京。渋谷区の古い木造アパートを拠点に、新たな格闘技修行の場を探した。

最初に見学希望の電話をしたのは第1志望だった大道塾。ところが「見学禁止」と言われ、都会の冷たさを感じ断念。

「そのときは、勝手に都会の大きな壁を感じました。のちに関係者に聞くと、入門者が殺到したため一時的に見学を制限していたそうです」

次に見学に向かったのは佐山聡氏率いるスーパータイガージム。自主練中で責任者は数日おらず日を改めてほしいとのことだった。結局最後はたどり着いたのが、渋谷にあった

極真空手の道場だった。これまでやってきた極真、投げはないが、まずは覗いてみた。「ここでは道場狭しと生徒が汗を流していました。その熱気に触れ「やはり極真を続けよう」と。指導されていたのは現・新極真会代表で、当時25歳の緑健児先輩でした。その人柄もあってか道場自体もとてもフレンドリーで、もちろん武道ですから先輩後輩の上下関係はありますが、家族的な温かい雰囲気でしたね」

18歳で親許を離れ、都会で一人暮らしを始めた吉倉青年には、安心できる居場所があったのだろう。極真の名門、東京城南支部で稽古を重ね、翌89年には全日本ウエイト制大会に初出場。ただし、出場枠の関係から重量級(75kg超級)のエントリーを余儀なくされた。当時の吉倉氏は78kgで階級内では最軽量に近い。体格差はいかんともしげなく、判定による2回戦敗退に終わった。

間に就職を挟み、次に全日本ウエイト制に挑戦したのは92年。覚悟をもって臨んだトーナメントは5回戦の準々決勝(延長判定負け)に終わったが、極真創始者の大山倍達総裁

の前で殊勲のベスト8入りを果たした。以降も仕事のかたわら週に一度空手指導員を務め、全日本ウエイト制大会で制覇を目指した。95年にはその前哨戦となる栃木大会中量級で優勝。「今年こそ」と土気も機運も高まったかに思われた、その矢先極真空手の創始者、大山倍達総裁逝去に端を発し、極真空手が大きく分裂。吉倉氏も時代に翻弄されることとなった。

その頃、独立したばかりだったが突然、極真(現・新極真会)の広報の仕事要請があった。「当時、城南支部の師範代だった入来武久先輩(現・新極真会東京城南川崎支部長)からの要請でとにかく、押忍、と引き受け練習も続けました。ただ、分裂騒動で大会が延期になるなど混乱は続き、予定の3ヶ月遅れで全日本ウエイト制大会が開催。当時2連勝中の三明広幸選手に延長判定で敗れたことも区切りとなり、ここで引退を決めました。以降、修行の成果の確認で地方大会に出たことはありましたが、独立したからは、しっかり仕事に集中しよう」と

「子どもの頃から釣堀、や写真販売、の商売を思いつきチャレンジしていた」

「ビジネス編・中学生で写真ビジネスを思いつき挑戦、小学生で釣り堀を開き小遣い稼ぎも」

それでは25歳で独立を果たし、現在もイーファイトを軌道に乗せるなどビジネス手腕をふるう氏の起業家・経営者としてのルーツとは。吉倉氏が最初にあげたのが少年時代、父のあるエピソードだった。

父は86歳になる今も写真コンクールで入賞するなどアマチュア写真家としての顔を持つ。その姿を見て吉倉少年は中学生の頃に素晴らしいアイデアを思いついた。父の一眼レフカメラを借りて祭りの様子や楽しむ人々を撮影し、写真を売って小遣いを稼ぎをしようと考えたのだ。当時一眼レフのような立派なカメラを持つ家庭は少なかった。

獅子舞の踊り手として頑張る子どもの写真をフィルムに収め、プリントした写真をアルバムに入れて一軒軒案内して回った。すると……。「一枚50円の写真をけっこう売れて800円ほどに。当時の小遣いは1日多くて100円だったから、私は大喜びでした。ところが、そんな私は父は笑って言ったのです。「フィルム購入代はうちのだし、現像代やプリント代もこちで出している。それだけでも千円、大赤字だ。ついでに言うとかメラもうちのだ。有頂天になった私に父は否定。売りが上がったお金がそのまま利益ではないと分かり、子どもながらに商売の厳しさを学びました」と笑っ。

小学5年の頃は魚を釣ってきたり小さな池に放し近所の子どもを集めて1回50円の釣り堀屋を思い付き友人と始めたことがあるという吉倉氏。仕入れもかからず小遣い稼ぎにはなったというが、ビジネスの難し

さを知った。そして高校で極真に入門すると師である浜井謙安師範が北陸でいち早くレンタルビデオに着目し業界を席卷するなど、弟の良明師範とともに事業で成功していた。空手に打ち込む一方、師範の活躍する姿を見て「自分もいつかは独立し、事業家になりたい」との夢も持ち、上京後は試運転のような形でビジネスに挑戦し始めてもいた。

「建築関係のバイトでお金を貯め、問屋から仕入れて売る小売、また当時流行っていたネットワークビジネスの阿姆ウェイも友人から誘われるままにやってみたけど、どれも1年と続けなかった。勉強にはなったけど性に合わなかった。発想が形になる仕事が見つかった」と語る。

そして独立のための修行にと大手情報会社の株式会社リクルートに入社。就職情報誌の広告営業マンとなったが、新人時代は苦戦、また苦戦の日々だったと吉倉氏は苦笑いで振り返る。

「広告営業マンは数字がすべての世界。最初は全然広告が取れず、そここそ存在自体を否定される毎日でした。でも「辞めたら負けだ」とこらえました」

負けず嫌いで営業成績を地道に伸ばし、入社2年目にはついに四半期の営業成績で全国1位を獲得。そしてついに「辞めたら負けだ」とこらえました。退社を断念した。「実は起業前に1年間のプランクがあります。この期間に、あえて小さな水産系の会社に勤め、チラシ作りから水産物・乾物の行商、会計までを経験しました。この経験でまずは一人で事業を行う基本プロセスを身につけ、25歳で独立したのです」

☆吉倉代表が撮影した写真公開



吉倉代表が初めて格闘技を撮影したのは高校2年の秋、入門したかった。1986年開催の極真空手の全日本大会で大山倍達の姿も。「父の一眼レフを借りて撮影。やっぱピンボケの格闘技写真デビュー作品です」



2019年の井上尚弥 vs D'ネア戦「高校生の頃より30年あまり、随分写真が上達しました。井上尚弥が右まがたを切り、苦戦しながらも攻める鬼気迫る表情が印象的でした」



19年の世界柔道で2連覇し会見する美女柔道家ダリア・ピロディ「わずか19歳、そしてこの美貌で世界2連覇は驚きました。会見中の笑顔が撮りました」

吉倉代表、体当たり取材編



伝説の空手家・山崎照朝氏の技術解説の相手を務める吉倉氏(右=本誌取材にて)



ロシア伝統武道田交流演武会(日本武道館)の取材で組技競技に腕が飛び込み参戦、大型外人選手に柔道の得意技「裏投げ」を決め勝利、45歳、これが最後の真剣勝負となっている=14年10月



弊社スタッフの希望者で不定期に行う武道・格闘技体験会。このときは沖縄空手の講師を呼んで行った。「ここから明日の体当たり取材者も出てきて欲しい・笑」と吉倉氏(中央)

「これまでのやり方だけでは、この数字は出せない。格闘技を扱うニュースサイトも増え、競争も激化してお

好調の理由は、端的にいえば「破壊と創造」の側面もあると吉倉氏は言う。

「これまでのやり方だけでは、この数字は出せない。格闘技を扱うニュースサイトも増え、競争も激化してお

Takuji Yoshikura

よしくら・たくじ
株式会社ヨシクラデザイン代表取締役、
イーファイト・プロデューサー兼編集長
1969年7月14日、富山県小矢部市生まれ。明治大学政治経済学部・政治学科卒業。小学生の頃から柔道、中学3年間はテニス部だったが高校から再び柔道。高校2年で編真空手入門。92年全国日本ウェイト制中量級ベスト8、県大会優勝など成績を残す。大手情報会社と小さな水産会社を経て、25歳で株式会社ヨシクラデザインを設立。2002年からインターネット事業に乗り出し、03年には格闘技情報サイト(現イーファイト)を立ち上げた。執筆、武道家、経営者を目指し歩み、その3つの世界を仕事につなげ現在に至る。



「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「ジャーナリストとして目標とするテーマも見つかり、2、3年ほどかけて政治ルポ的に潜入取材もしました。自分なりに取材の答えは出たのです

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「作家志望は仕事の依頼なんかなく切って吐露すると、鬼頭氏の答えは予想以上に厳しいものだった。

「破壊と創造、否定されてもそこに大きな宝が隠れているもの。固定観念にとらわれない心を」

「成長の理由、次世代の若手出現にも期待」

2019年からは経営だけでなく新たにイーファイト編集長も兼務する吉倉氏。社長である自分が編集長の座に就いたからには、業績アップが至上命題だ。

その決意をもって試行錯誤を繰り返して、現在ではアクセスとユーザー数、売上ともに、就任以前の2〜3倍に。ここ約1年はサイト運営の重要な指針となるページビュー数も月間1000万を超える。

好調の理由は、端的にいえば「破壊と創造」の側面もあると吉倉氏は言う。

「これまでのやり方だけでは、この数字は出せない。格闘技を扱うニュースサイトも増え、競争も激化してお

「破壊と創造」の側面もあると吉倉氏は言う。

「これまでのやり方だけでは、この数字は出せない。格闘技を扱うニュースサイトも増え、競争も激化してお